

この春から大学で教えるという仕事に加わった。過去に非常勤講師をつとめたことがあるが、継続的な講義ははじめてのこと。未知の体験に戸惑いつつ、学ぶことも多い。

担当している講座に「文章読解と表現」がある。日本語の文章講座である。同僚の教員たちとともに担当しているが、辞書を持参し、四百字詰め原稿用紙に鉛筆で手書きする方式を採っている。

世はパソコン時代、手書きの機会は減っているが、手書き方式がもっとも書く力を養うという。企業でも新入社員教育に手書きを採用しているところがある。便利な道具は生まれても学力をつけるに即席術はないということであろう。

近年、日本語力の低下を嘆く声が多いが、唱和したい気分である。毎日、新聞を読んでいる学生は握り飯の黒ゴマごとくに少ない。本を読むものも少しかりである。

活字離れの時代、素材にも知恵を絞らないといけない。点と丸、一字あけと改行といったイロハのことからはじめ、新聞のコラムを書き写すこと、社説を要約して感想を記すこと、高校の恩師に近況報告の手紙を書くこと……なども行ってきたが、携帯ネット時代のこと、手紙を書く習慣が失せている。日本語力の低下は、心血注いでラブレターを書くことがなくなったことにもかかわりがあるのではあるまいか。

とまあボヤキ合っているのであるが、授業を重ね、添削を行っているうちに幾分なりとも文章も良くなってきたように思えて、手応えはある。

大学1年生は平成生まれである。もとより人となりはさまざまであるが、豊かな時代の下、のんびりと育った屈託ない若者が多い。

良く書けていると思える文章は、次回の授業、教壇の前で本人に読んでもらうようにしているのだが、高校の恩師への手紙ではF君を指名した。時候の挨拶も結語も抜けているが、野球部の恩師への気持が出ていていいと思った。読む前、F君はこうのたもうた。

「先生、今日は悪文の事例紹介ですね」

切り返されて思わず笑ってしまった。

「文学における旅」という科目も受け持っている。当初、古典の紀行文を予定していたのだが、読んでも面白くない。私が面白くないものがいまの学生たちに受け入れられるとは思えず、『深夜特急』（沢木耕太郎）、『太平洋ひとりぼっち』（小田実）など、近い時代の青春紀行文学を取り上げている。

授業のやり方は、抜粋をコピーして渡し、次週の授業で輪読する。数人がグループになり、レポーター役も持ち回りだ。この方式を教えてくれたのはアメリカの大学を出ている友人であったが、いいアドバイスをくれたと感謝している。折々、レポート提出も課しているが、内面が吐露されているものがあって、どう生きるべきかという問いを抱える青春の季節に変わらないのだとも思う。

この講座には、難聴で、音のない世界に棲む N さんがいる。とても真面目な女子学生で、毎回読書メモを書いてきて討論にも参加する。発する言葉はわかりにくいですが、レポーター役もきちんとかなす。回を重ねると、私も他の学生も彼女のハンディを意識しなくなっている——。この仕事にかかわって良かったと思う体験のひとつである。

同じ講座に、ポコちゃんと私が渾名をつけた女子学生がいる。本を読むのは苦手のようなのであるが、明るくて愛らしい性格をしている。

食堂で顔を合わせたおりに訊いた。

「おいポコちゃん、感想文のレポートがまだ出とらんぜ」

「センセ、大丈夫。いま大急ぎで“特急列車”を読んでるよって」

この日しばらく愉快的な気分で過ごせた。

気分のすぐれぬ日もある。総じて反応の乏しい学生には困ってしまう。話しても通じていないと思うと辛いものがある。

一時間半の講義は結構長い。当初は、準備したことをしゃべって腕時計を見ると三十分もたっておらず、さてこれからどうしようと思ったりもした。他のことと同じように、いい授業をするには十分な準備を必要とする。講義が終わると、ふとお疲れさんという言葉が口をついて出たりする。

驚き、戸惑い、ときに苦笑し、また立腹したり。新米教員の慣れない日々が続いている。